2023年12月の総評に代えて　　高橋修宏

氷柱落とす地球滅びるときの音　　（桜望子　山形県）

ここでは「氷柱」が毀れる音を、作者は「地球滅びる」ときの音として感受した。日常の季物が、そのまま地球大へ接続されてゆく。どこか類想感のある表現でもあるが、たしかに今日の時代性が書きとめられている。

初雪　死者を声から忘れる　　（長谷川柊香　宮城県）

なるほど「死者」の顔や仕草は覚えていても、その「声」が想い出せないときがある。健常者とも呼ばれる私たちにとって、視覚よりも聴覚は、やはり心もとない感覚であるのかもしれない。ただ、そのように忘却することによって「死者」は、真の「死者」として私たちの傍に寄りそってくれるのだろう。そう、「初雪」のように…。

白鳥がゆっくり湖を飛び立って　　（小島涼我　東京都）
あなたの静かな水面に降りる

現実の景が、シームレスに内面の景に接続される映像的な作品。「白鳥」が何らかの意味や象徴を呼び出すのではなく、ただ「ゆっくり」、そして「静かな水面」に降り立ってゆく。その静謐なイメージだけを、読者は享受すればよいのだろう。

具の遠いおにぎりの具に辿りつく　　（松下誠一　東京都）

どこか滑稽でユーモラスな一句。たしかに梅干しであれ塩鮭であれ、「具」のある「おにぎり」を食べるときに、私たちが経験している感覚。「具」のない塩むすびでは、こんな一句にはならない。

明日を見て一旦栞を挟んだら　　（源楓香　東京都）
そこで世界の呼吸は止まる

何よりも、「世界の呼吸」という発見が良い。どのような本であれ、それは多種多彩な「世界」が呼吸している。誰かに読まれることで「呼吸」をはじめ、「一旦栞」を挟むことで「呼吸」を止めるのだ。

冬ざれか手を見るだけにして帰る　　（吉冨快斗　埼玉県）

その「手」が、誰のものであるかは記されていない。だが「見るだけにして帰る」という振るまいが、「冬ざれ」という荒涼とした気配と共振し、直ちに「帰る」という行為が強く印象づけられる。かつて塚本邦雄が、鈴木六林男の〈嬰児の赤き舌を見たれば直ぐ帰る〉を取り上げ、〈俳諧とは見て直ぐに帰る心の謂〉と記していたことも想い起こした。

詩はいつもひとりで生まれてきた　　（あお　奈良県）
ような顔をするから油断できない

おそらく、すぐれた詩とは「ひとりで生まれてきたような顔」を、しているものなのだろう。そのとき作者は、その「詩」から弾き出され、ひとりの読者になっている。そんな「油断できない」シーンを求めつづけることが、詩作と呼ばれるものなのかもしれないが…。

ひとりいる一人の汚れ六林男の忌　　（田崎森太　東京都）

戦後の俳句の世界に確かな足跡を残した鈴木六林男。この「ひとり」も「一人」も、あくまで単独者として表現を為そうとしてきた六林男らしいキーワードだ。実存的とも呼べる「一人の汚れ」を見つめることは、彼の表現にとっての始まりでもあった。

雪の原血液型を教えあう　　（吉沢美香　宮城県）

真っ白な「雪の原」は、それだけでイノセントな気配が漂う。そこで「血液型」という最小限の個人の情報を教えあうという行為は、ささやかで私秘的なコミュニケーションの始まりなのかもしれない。

どこへでも自転車だった　　（玻璃　愛媛県）
初夏だった

一見、素っ気なく記されながら気持ちの良い作品。二行目の「初夏だった」に確かな実感が通う。想い出すことが、そのままポエジーを引き出すようだ。

せみの脱殻のぬけがら被ばくの地　　（大嶋碧月　兵庫県）

「脱殻」は実体であろうが、その「ぬけがら」は虚体と呼ぶべきものであろう。ひとつの単語を漢字とひらがな表記で重畳させることによって、シュルレアル（超現実）な強度が生まれた。ときに〈グラウンド・ゼロ〉とも称される「被ばくの地」のイメージを切り取っている。

なんだろう、　　（雲理そら　大阪府）
光ってる、あれ、あれはなに
あれは昨日のきみのぬけがら

前作と同様「ぬけがら」がキーワードになっているが、ここでは「昨日」という時間を伴うストーリー性が秀逸。どこか科白めいた語りかけが、「光ってる」ぬけがらを映像的に表象する。

どうぶつのシールを入れて　　（桜庭紀子　和歌山県）
封をする

君が向こうで遊べるように

もしや、「君」は亡くなったのだろうか。「どうぶつのシール」という一見あどけない事物が、幼い「君」のイメージを読者に手渡す。三行目の願いが、切なくも美しい。

名前をつけたくないんだ　　（媛斎　愛媛県）
見えなくなっちゃうじゃないか

名づけるという振るまいをめぐるラジカルな問いを含んだ一作。二行目の「見えなくなっちゃう」が、いい。

餓死　射殺　空襲　薬殺　　（ひろみ　京都府）
からっぽの上野動物園に雨が降る

ドキュメンタルな作品。何も、戦争の犠牲となるのは人だけではない。一行目では、戦時中の「上野動物園」で動物たちが死んでいった理由が、単々と記されている。「空襲」だけでなく、「餓死　射殺　薬殺」によって飼い主の手で殺されていったのだ。いま、人間の視点ばかりでなく、人間以外からも戦争の悲惨さを捉えることが求められているのではないか。二行目の空虚な光景は、余りにも切なく無惨だ。